

学位論文要旨

中国人中上級日本語学習者のナラティブ
における評価方略の使用実態
— 言語形式と評価対象を中心に —

広島大学大学院 教育学研究科

教育学習科学専攻 日本語教育学分野

D164828 陳真

I. 論文題目

中国人中上級日本語学習者のナラティブにおける評価方略の使用実態—言語形式と評価対象を中心に—

II. 論文構成（目次）

第1章 序論

- 1.1 本研究の背景と目的
- 1.2 本論文の構成

第2章 ナラティブにおける評価方略に関する先行研究

- 2.1 ナラティブにおける評価方略
 - 2.1.1 ナラティブの定義と構成要素
 - 2.1.2 評価方略の定義と分析単位
- 2.2 ナラティブにおける評価方略に関する分析
 - 2.2.1 ナラティブの種類
 - 2.2.2 評価方略の分類
- 2.3 中国語と日本語のナラティブにおける評価方略の使用実態
- 2.4 学習者のナラティブにおける評価方略の使用実態
 - 2.4.1 評価方略の使用頻度
 - 2.4.2 評価方略の言語形式
 - 2.4.3 評価方略の評価対象
- 2.5 先行研究から得られた知見と本研究の目的

第3章 日本語のナラティブにおける評価方略の分類—抽出基準と分類基準に注目して—

- 3.1 調査概要
 - 3.1.1 調査材料
 - 3.1.2 調査協力者
 - 3.1.3 調査の手続き
 - 3.1.4 データ処理
- 3.2 結果と考察
 - 3.2.1 ナラティブにおける評価方略の分類過程
 - 3.2.1.1 評価方略の抽出基準
 - 3.2.1.2 評価方略の分類基準
 - 3.2.2 ナラティブにおける評価方略の分類
 - 3.2.2.1 評価節の分類
 - 3.2.2.2 評価表現の分類

第4章 中国人日本語学習者のナラティブにおける評価方略の使用実態—使用頻度と

言語形式を中心に―

- 4.1 調査概要
 - 4.1.1 調査材料
 - 4.1.2 調査協力者
 - 4.1.3 調査の手続き
 - 4.1.4 データ処理
- 4.2 分析方法
- 4.3 結果
 - 4.3.1 評価方略の使用頻度
 - 4.3.2 評価節の言語形式
 - 4.3.2.1 心的状態
 - 4.3.2.2 意見表明
 - 4.3.2.3 意図, 目的, 願望, 希望
 - 4.3.2.4 仮説, 推測, 推論, 予測
 - 4.3.3 評価表現の言語形式
 - 4.3.3.1 心的状態
 - 4.3.3.2 意見表明
 - 4.3.3.3 発話態度
 - 4.3.3.4 情報補足
 - 4.3.3.5 因果・逆接関係
- 4.4 結果のまとめと考察

第5章 中国人日本語学習者のナラティブにおける評価方略の使用実態―出現位置と評価対象を中心に―

- 5.1 データ
- 5.2 分析方法
- 5.3 結果
 - 5.3.1 評価節の出現位置と評価対象
 - 5.3.1.1 要旨
 - 5.3.1.2 設定・方向付け
 - 5.3.1.3 出来事の進行
 - 5.3.1.3.1 場面1: 家や森の中で蛙を探す場面
 - 5.3.1.3.2 場面2: 同行する犬の行動を描く場面
 - 5.3.1.3.3 場面3: 鹿に怒られ, 川に投げられる場面
 - 5.3.1.4 解決・結果
 - 5.3.1.5 終結
 - 5.3.2 評価表現の出現位置と評価対象
 - 5.3.2.1 出来事節
 - 5.3.2.1.1 登場人物の動作
 - 5.3.2.1.2 登場人物の動作と関係がある場所・人物など
 - 5.3.2.2 背景情報節
 - 5.3.2.2.1 メタ的な説明

- 5.3.2.2.2 時間, 場所, 人物の關係, 物の変化
- 5.3.2.2.3 登場人物の状態
- 5.3.2.3 評価節
 - 5.3.2.3.1 話者や登場人物の心的表明
 - 5.3.2.3.2 話者や登場人物の意見表明
 - 5.3.2.3.3 話者や登場人物の意図, 目的など
 - 5.3.2.3.4 話者や登場人物の仮説, 推測など
- 5.4 結果のまとめと考察

第6章 結論

- 6.1 本研究のまとめ
- 6.2 総合考察
 - 6.2.1 中国人中上級日本語学習者における評価方略の言語形式の選択傾向
 - 6.2.2 中国人中上級日本語学習者におけるナラティブの展開の仕方の特徴
- 6.3 教育的示唆
- 6.4 今後の課題

参考文献

Ⅲ 論文要旨

第 1 章 序論

1.1 本研究の背景と目的

ナラティブとは、一連の出来事を語る談話のことを指す (Labov, 1972 ; 南, 2005)。ナラティブを語る際、話者は様々な手段を用いて、話の面白さ、臨場感などを表すが、これを評価方略という (Labov, 1972)。しかしながら、ある程度習熟度が高い学習者であっても、まとまった話をするとき、自らの気持ちや観点を適切に伝えることが容易ではないと言われている。近年、第二言語学習者を対象として、評価方略の使用実態についての解明が進んでいるが、これらの研究では、英語をもとに評価方略が分類されており、この分類基準をほかの言語に応用することは必ずしも容易ではない。また、評価方略の分類基準は研究間で一致した結果が得られていない。このほかにも異なる評価方略の使用頻度に関する分析が少ないこと、対象とされる言語形式が話者や登場人物の気持ちを表す表現に限られていること、出来事の進行部分についてはあまり分析されていないことなど残された課題は多い。

以上を踏まえ、本研究では、日本語をはじめとする他言語においても使用可能なより普遍的な評価方略の枠組みを設定する。その上で使用頻度、言語形式、評価対象という 3 つの側面について日本語母語話者との比較分析を行い、中国人日本語学習者のナラティブにおける評価方略の使用実態を明らかにする。

1.2 本論文の構成

全 6 章で構成されている。第 1 章では、問題の所在と本研究の目的を述べ、第 2 章では、先行研究の概観と研究課題の提示を行う。第 3 章では、評価方略の分類を検討する。第 4 章では使用頻度と言語形式の側面から、第 5 章では出現位置と評価対象の側面から、学習者の評価方略の使用実態を分析する。第 6 章では、各章の研究結果を総合的に分析し、考察する。その上で、教育的示唆及び今後の課題を述べる。

第 2 章 ナラティブにおける評価方略に関する先行研究

2.1 ナラティブにおける評価方略

ナラティブとは何かについて、Labov & Waletzky (1967) は「過去の経験を時間的、空間的連続体として、その流れに沿って再現するもの」(南, 2005 : 56) と定義している。評価方略とは、ナラティブのすべての内容を対象とし、話者や登場人物の態度、立場、観点や感想を示す手段である (Hunston & Thompson, 2000)。評価方略を分析するための単位として、評価節と評価表現の 2 種類が採用されている。評価節は、一文あ

るいは一発話からなり、それだけで命題を構成する。一方、評価表現は、発話や文の一部に出現し、その発話や発話の一部に対する評価を示す (Peterson & McCabe, 1983)。

2.2 ナラティブにおける評価方略に関する分析

個人的な経験談における評価方略は数も種類も多いことから、評価方略の使用実態を広く分析するのに有効である。これに対し、視覚提示した材料に基づく描写課題は、ナラティブの内容を話者間で統一できることから、使用された評価方略の比較が行いやすい。英語のナラティブの評価方略の研究では、言語形式 (Labov, 1972) と評価の意味内容 (Peterson & McCabe, 1983) に着目して分類がなされているが、その分類基準は統一されておらず、形式と内容の混同がみられる。一方、日本語の評価方略の分析では、使用頻度の高いものに偏った研究がなされているだけで、ナラティブの評価方略を分類する適切な方法については検討されていない。

2.3 中国語と日本語のナラティブにおける評価方略の使用実態

中国語と日本語のナラティブにおける評価方略の使用実態を直接比較した先行研究は少なく、それぞれを英語のナラティブと比べたものがほとんどである (Wang & Leichtman, 2000 ; Minami & McCabe, 1995)。これらの研究からは、日本語よりも英語のほうが、また、英語よりも中国語のほうが「感情状態を表す表現」や「価値判断を表す表現」の使用が多い可能性が指摘されている。また、鳥 (2012) によると、日本語のナラティブは順接を中心に語りを進め、場面間の関連が緊密であるのに対し、中国語のナラティブは逆接の接続表現が多く、「急に」など場面展開の機能を持つ副詞を多く使用するという言語間の違いが明らかになっている。

2.4 学習者のナラティブにおける評価方略の使用実態

評価方略の使用頻度を分析した先行研究 (Kang, 2003 ; Liskin-Gasparro, 1996) では、母語話者は学習者よりも評価方略を多く使う傾向があること、母語話者はヘッジや人物描写などの評価表現、話法という評価節を多く使用するのに対し、学習者は自分の感想を直接的に述べる評価節の使用が多い傾向があることがわかった。しかしながら、何を評価方略とするかは先行研究によって異なるため、学習者の使用傾向が明らかになったとは言えない。

評価方略の言語形式に着目した研究 (鳥, 2012 ; 小口, 2017) では、日本語母語話者は様態を表す表現や状況を説明するオノマトペを使って、絵本に描かれている内容を漏れなく再現しようとする一方で、学習者は感情形容詞や心情動詞など自分の感想を述べる言語形式を多く使用するとされている。しかしながら、先行研究では、使用頻度を中心とした分析に留まり、対象とされた評価方略の分類と言語形式がどのように

対応しているのかが不明であることから、評価方略の言語形式の全体像が明らかになったとは言えない。

また、どのような事柄が評価の対象となるかについて、先行研究ではナラティブの開始部と終結部において、母語話者よりも学習者のほうが評価方略を多く使用することが報告されている。これに対し、出来事の進行部分においては、評価方略がどのような評価対象に対して用いられているのかについて十分検討されていない。さらに、Bamberg & Damrad-frye (1991) は、評価方略にはストーリーの目標など全体的な流れを対象とするものがあると指摘しているが、この点についても検討する余地がある。

2.5 先行研究から得られた知見と本研究の目的

本研究では、中国人日本語学習者のナラティブにおける評価方略の使用実態を明らかにするために、以下の課題を設定する。

研究課題 1 客観性、信頼性が高いナラティブにおける評価方略の分類を構築する。

【第 3 章】

研究課題 2 日本語母語話者と中国人日本語学習者において、評価方略の使用頻度と言語形式に違いがあるかどうか、あるならばどのような違いがあるか検討する。【第 4 章】

研究課題 3 日本語母語話者と中国人日本語学習者において、評価方略の出現位置と評価対象に違いがあるかどうか、あるならばどのような違いがあるか検討する。【第 5 章】

第 3 章 日本語のナラティブにおける評価方略の分類—抽出基準と分類基準に注目して—

3.1 調査概要

信頼性・客観性を保証でき、評価方略の表現と機能を分析するのに有効な評価方略の分類を構築するために、データには日本人大学生と大学院生(計 29 名)に絵本(“Frog, where are you?” (Mayer, 1969)) の絵を見て話を理解してもらい、聞き手に対して、絵本やメモを見ないで語ってもらったものを用いた。

3.2 結果と考察

3.2.1 ナラティブにおける評価方略の分類過程

評価方略の分類には、抽出と分類という 2 段階があり、それぞれ一定の基準に従って行われる。評価節は「話し手や登場人物の態度、立場、感想、観点を表す手段」という定義に基づき抽出する。一方、評価表現の抽出は、「比較性」、「主観性」、「価値観負

荷性」という評価表現の 3 つの特徴を基準として、これらを含む表現を抽出することとする。評価表現の抽出範囲は、背景情報節、出来事節、評価節の主要部ではない部分とする。また、抽出した評価節と評価表現は評価の意味内容を基準として分類を試みる。本章では、抽出基準を評価表現の特徴に絞るという点、背景情報節、出来事節、評価節では、評価表現の抽出範囲を主要部以外の部分に絞るという点から、客観性を担保しつつ、評価方略、特に評価表現の抽出基準を捉え直した。

3.2.2 ナラティブにおける評価方略の分類

評価節は「心的状態」、「意見表明」、「意図、目的、願望、希望」、「仮説、推測、推論、予測」の 4 つに分類した。また、絵本に基づいたナラティブの評価節では、話し手の視点と登場人物の視点が同時に存在するため、視点の違いも考慮して分類することにした。評価表現の分類については、その評価表現だけで、話し手や登場人物の気持ち、観点を表すものを、「心的状態」と「意見表明」に分類した。また、主要部の表現に付加され、話し手や登場人物の気持ち、観点を表す評価表現を、「発話態度」、「情報補足」、「因果・逆接関係」に分類した。これにより、コーディングにおける恣意性を排除し、より客観的で信頼性の高い評価が可能となると考える。

第 4 章 中国人日本語学習者のナラティブにおける評価方略の使用実態—使用頻度と言語形式を中心に—

4.1 調査概要

3.1 と同じ調査材料を用いて、同じ手続きで中国の大学で日本語を専攻とする中国人学習者（28 名）から収集した語りを用いた。

4.2 分析方法

評価方略の使用頻度を分析する際に、まずは、日本語母語話者と学習者の評価方略の 1 人当たりの平均使用頻度を比べた。その上で、評価節や評価表現、そしてそれぞれの分類の平均使用頻度を比較した。評価方略の言語形式を分析するにあたっては、第 3 章で検討した評価方略と対応する形式に従って、評価節と評価表現の言語形式の平均出現数を比較した。さらに、ナラティブの文脈と言語形式の特徴を踏まえた上で、評価節と評価表現がどのような内容を表しているのかについても考察対象にした。

4.3 結果

日本語母語話者と学習者は「意見表明」や「心的状態」という評価節、「情報補足」や「発話態度」という評価表現を主に使用している点では共通していた。一方、登場人

物の視点の場合、日本語母語話者は各分類の評価節を平均で1回程度用いていたが、学習者は評価節をほとんど発話していなかった。また、評価節の言語形式について、話し手の視点の場合、学習者は母語話者に比べ、感情状態や判断を表す表現と「陳述副詞・真偽判断を表すモダリティ表現など」との共起を含む評価節の使用が少なかった。そして、評価表現の言語形式について、日本語母語話者は陳述副詞・情態副詞を用いて、登場人物の動作や周辺の環境を説明していた。一方、学習者は、事態の深刻さや厳しさ、登場人物の意志・態度を主張する傾向が見られた。

4.4 結果のまとめと考察

学習者は日本語母語話者ほど評価方略を使用しておらず、ある程度談話能力が発達した中上級学習者であっても、評価方略の使用が不十分であるという実態が示された。学習者の語りには登場人物の視点からの評価節がほとんど見られなかった。これは、学習者が「話法」を十分に使いこなすことができないことが一因として考えられる。また、学習者は感情状態や判断を表す表現と「程度・情態副詞」との共起を含む評価節を多く使用していた。これは、学習者が自らの気持ちや観点を聞き手に確実に伝えるためにとる独自のストラテジーであると考えられる。さらに、学習者は情態副詞を用いて、厳しい状況や登場人物間の対立関係を取り上げながら語りを進め、聞き手の共感を求める傾向が示唆された。

第5章 中国人日本語学習者のナラティブにおける評価方略の使用実態—出現位置と評価対象を中心に—

5.1 データ

4.1のデータを用いた。

5.2 分析方法

評価節の出現位置と評価対象の分析では、Labov (1972) に従い、まずナラティブを「要旨」、「設定・方向付け」、「出来事の進行」、「解決・結果」、「終結」という5つの構成部分に分けた。その上で、各部分では、学習者に用いられた評価節の平均出現数と評価対象を、日本語母語話者と比較した。評価表現の出現位置と評価対象を分析するために、ナラティブの節を「出来事節」、「背景情報節」、「評価節」に分類し、それぞれの節で、母語話者と学習者が使用した評価表現の平均出現数と評価対象を比較した。

5.3 結果

評価節の出現位置と評価対象について、日本語母語話者も学習者も出来事の進行部分において評価節を最も多く使用していた。また、日本語母語話者と比べ、学習者は重要度が異なる場面を評価節によって区別しない傾向が見られた。学習者はナラティブの内容に対する自分の感想を「心的状態（話し手）」でメタ的に述べる発話も観察された。評価表現の出現位置と評価対象について、日本語母語話者は情報の正確さや内容の連続性、物事の結末を述べようとしていたのに対し、学習者は唐突な動作や主人公の達成目標に関心を示していた。また、日本語母語話者と比べ、学習者の評価表現の使用は達成目標の対象である蛙に集中していた。さらに、学習者は遭遇した困難や登場人物の感情・意見を強めるためにだけ、評価表現を使用する傾向が見られた。

5.4 結果のまとめと考察

学習者は満遍なく評価節を使用する傾向があり、メリハリのない語りになっていた。このことが学習者のナラティブが聞き手にとって理解しにくくなる原因とも考えられる。また、学習者は犬の気持ちや物語に対する自分の感想などの外部評価を付け加えて描写する傾向にある。日本語母語話者と比べ「発話態度」や「因果・逆接関係」への言及が少なかったことから、学習者は表現の妥当性を吟味する話者の意識を聞き手に見せながら、語りを進めることが難しいことがわかった。さらに、母語話者はストーリー展開の様々な場面で登場人物の状態を報告していたが、学習者は目標とする対象（蛙）に関わる時間、場所、登場人物の状態を述べていた。この点については、前景情報から後景情報へと語りが発達するとした（南，2017）を支持する結果になったと言える。

第6章 結論

6.1 本研究のまとめ

本研究では、まずは評価方略の抽出基準と分類基準を再考し、客観性、信頼性が高いナラティブにおける評価方略の分類を構築した。次に、評価方略の使用頻度と言語形式を分析した結果、日本語母語話者も学習者も「意見表明」や「心的状態」という評価節、「情報補足」や「発話態度」という評価表現を比較的によく使用していたが、日本語母語話者のほうが使用した評価節の種類が豊富であった。また、学習者の語りは一つ一つの場面が切り離されたように聞こえ、物語の流れより話者や登場人物の意見が前面に押し出されて聞こえる可能性があるという問題が明らかになった。さらに、評価方略が何を対象としているかについても分析を試みた結果、日本語母語話者は絵本の特徴、聞き手の理解を促す文脈情報、ストーリーの流れの合理性を表明したり、登

場人物の即時的な反応や意見を述べたりしていた。それに対し、学習者はナラティブの内容に対する自らの感想、聞き手にとって唐突に聞こえる可能性がある登場人物の動作や目標の達成を促進する動作などを示す傾向が見られた。

6.2 総合考察

6.2.1 中国人中上級日本語学習者における評価方略の言語形式の選択傾向

まず、中国人中上級日本語学習者は引用節を殆ど使用していなかった。このような話法の不使用は、情報の精緻化やリアルな感情表出を妨げ、語りの臨場感や面白さを効果的に伝えられないという問題の原因になっている可能性がある。次に、中国人中上級日本語学習者は「程度・情態副詞」で自分の気持ちや観点を強める傾向が見られた。しかし、自分の気持ちや観点を程度副詞で一方向的に主張する話し方は、日本語母語話者には好意的に受け取られない可能性がある。さらに、学習者は物語の流れに沿って語るのではなく、個々の場面での話者や登場人物の意見を表明しながら進めることから、中上級学習者は談話全体の焦点を際立たせるために、様々な評価方略を効果的に使用するレベルには至っているとは言えない。

6.2.2 中国人中上級日本語学習者におけるナラティブの展開の仕方の特徴

まず、日本語母語話者は主線から逸脱した場面と比べ、クライマックスを示す場面が多く評価節を用いていたが、学習者はこの二つの場面で使用した評価節の数がほとんど変わらなかった。学習者が第二言語でナラティブを語る際には、局部的な内容の言語化に注意が取られ、俯瞰的な視野で物語全体を捉えることが難しい可能性がある。次に、学習者は出来事節や背景情報節だけに絞って、主人公の目標に言及するため、描写が単純になりがちで、同じことを繰り返し言っているように聞こえる恐れもある。中上級学習者はナラティブの展開に沿って評価節で主人公の目標に言及することができないと考えられる。さらに、中国人中上級日本語学習者の語りには、聞き手の理解を促す時間性 (temporality) や因果性 (causality) の提示が不足しているため、話者や登場人物の気持ち・観点が効果的に伝わらない可能性がある。

6.3 教育的示唆

まず、第 1 に教育現場では、失敗談など学習者にとって身近で、比較的多くの評価方略が使われる話題を用いて、「心的状態」、「意見表明」など話法で示された評価節をいつどのように使い分けるのか指導すべきである。第 2 に、学習者にナラティブやスピーチの指導をする際、聞き手の感情への配慮を如何に示すかを考えさせる指導をすることが望ましい。第 3 に、メリハリをつけながら、ナラティブの各場面を展開させるために、教室で指導を行う必要があると考えられる。

6.4 今後の課題

今後は、個人談など評価方略の多様性がみられるナラティブを調査対象とし、より総合的、柔軟的に評価方略の分類を考察することが課題として挙げられる。また、中国人中上級日本語学習者に見られた傾向が母語によるものであるかどうかは、中国語のナラティブのデータと日本語のデータを比較して検証する必要がある。最後に、上級日本語学習者を対象に同様の分析を行うことで、習熟度による影響について明らかにすることができると思う。

参考文献

- 鳥日哲 (2012) 「中国語を母語とする日本語学習者の語りの談話における表現と構造：日本語母語話者との比較を通して」一橋大学，博士論文。
- 小口悠紀子 (2017) 「談話における出来事の生起と意外性をいかに表すか—中級学習者と日本語母語話者の語りの比較—」『日本語／日本語教育研究』8, 215-230.
- 南雅彦 (2005) 「談話（ディスコース）構造の発達」岩立志津夫・小椋たみ子（編），『よくわかる言語発達』, 54-57, ミネルヴァ書房。
- 南雅彦 (2017) 『社会志向の言語学：豊富な事例と実証研究から学ぶ』くろしお出版。
- Bamberg, M., & Damrad-Frye, R. (1991). On the ability to provide evaluative comments: Further explorations of children's narrative competencies. *Journal of Child Language*, 18, 689-710.
- Hunston, S., & Thompson, G. (2000). *Evaluation in text: Authorial stance and the construction of discourse*. Oxford, UK: Oxford University Press.
- Kang, J. Y. (2003). On the ability to tell good stories in another language: Analysis of Korean EFL learners' oral "Frog story" narratives. *Narrative Inquiry*, 13, 127-149.
- Labov, W., & Waletzky, J. (1967). Narrative analysis. In J. Helm (ed.), *Essays on verbal and visual arts* (pp. 12-44). Seattle, WA: University of Washington Press.
- Labov, W. (1972). *Language in the inner city: Studies in the Black English vernacular*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Liskin-Gasparro, J. E. (1996). Narrative strategies: A case study of developing storytelling skills by a learner of Spanish. *The Modern Language Journal*, 80(3), 271-286.
- Mayer, M. (1969). *Frog, where are you?* New York: Dial Press.
- Minami, M., & McCabe, A. (1995). Rice balls and bear hunts: Japanese and North American family narrative patterns. *Journal of Child Language*, 22(2), 423-445.
- Peterson, C., & McCabe, A. (1983). *Developmental psycholinguistics: Three ways of looking at a child's narrative*. New York: Plenum Press.

Wang, Q., & Leichtman, M. D. (2000). Same beginnings, different stories: A comparison of American and Chinese children's narratives. *Child Development, 71*(5), 1329-1346.